

【三陰三陽の考え方 2 カゼのひき始め 太陽病と少陰病】

一般的に、病は太陽病から始まると考えられます。太陽病は、脈状は浮で、悪寒、発熱、頭痛、項背部痛を伴い、もともと健康な人がカゼなどの急性熱性疾患に罹患した場合の初期症状に似ています。

代表的な太陽病の薬方は、桂枝湯（けいしとう）、麻黄湯（まおうとう）、葛根湯（かつこんとう）などで、いずれも汗を出させたり、熱を冷ましたりする働きがあります。

この太陽病は健康な人が病気になった時の初期症状ですが、ご高齢の方や基礎疾患として心臓や腎臓に病のある方がカゼに罹患しますと、ぞくぞくとした感じはあっても発熱は軽度、脈状は沈んでいる、そして自覚症状は足が冷え、頭が重く、何となく気分が悪いなどの症状と共に、ただ横になって寝ていたい、という訴えになります。こうした病態を、陰から発した病として少陰病とよびます。真武湯（しんぶとう）、麻黄細辛附子湯（まおうぶしさいしんとう）、麻黄甘草附子湯（まおうぶしかんぞうとう）などの薬方を用います。いずれも強心、利尿作用があります。

太陽病も少陰病も表証の病ですが、自覚症状として太陽病では熱、少陰病は冷えを感じる病態です。